



納屋雑記

2011



なんとなく納屋

(初出：Facebook 2011/07/28)

ホンスミさんがらくだ書店のことを紹介していたのを見て、ふと思い出した。

そうだ、この本屋は学生時代の下宿から一番近くて大きな本屋だったのだ。

大きな本屋というのはよくあるのだが、ここは一風変わっていた。二階がカフェのようになっていて、店の中の本を読みながらコーヒーが飲めるのである。

画期的で斬新なアイデアだが、名古屋ではひょっとしてこれが普通なのかも思ったりした。

名古屋は文化的に独立圏を形成している。自転車は「ケッタ（マシーン）」だし、昼休みは「昼放課」だし、自動車学校は「しゃこー」だ。いずれも、他県では通じないのだが、名古屋文化圏では当然それが標準語だと信じられている。いささかの疑問もそこにはない。

そんなわけなのだが、こういう文化は大歓迎である。

とはいえ、実際に自分で試したことはない。だって本を読むなら買ったものを家でゴロゴロしながらとか、公園のベンチの木漏れ日の中で読みたいじゃないか。公園で読んだことないけど。

らくだ書店の地図を眺めているうちに、そういえば自分の住んでたアパートはまだあるのか気になってきた。

学生時代なので今から15年も前の話である。

住所すら覚えていない。

名古屋の地図は碁盤状なので、どの道だったかもよくわからない。

辛うじて、斜めに通る（もちろん地図上、だ）飯田街道沿いだったことを思い出す。バス通りと交差していて……パチンコ屋が角にあったような気がする……。

こういううろ覚え状態だと、googleのストリートビューは便利である。

なんとなく見覚えのありそうな辺りに人形アイコンを置いてみる。

おお。見事だ。見事に廃れている（汗）。

角のパチンコ屋はなくなり、見覚えのないうどん屋ができています。学生時代にこれがあったら、身体の20%くらいはうどんで構成されていたかもしれない。

角を曲がり、道沿いに進む。見覚えのある風景に、見覚えのない建造物が混じり込んでいる。不思議な体験だ。

少し進むと、見覚えのあるログハウスのようなものが見えてきた。これだ！ このログハウスみたいなもの（今でもよくわからない）の上にアパートがあったのだ。

しかして、そのアパートは今もそこにあった。感動の対面である。

鉄筋コンクリートの建物はすっかり古ぼけて見えた。クリーム色だった外壁は、15年間の疲れを宿したような薄汚れた白っぽい色になっていた。

記憶がよみがえってくる。

そうだ、向かいに大家の経営するコンビニがあったはずだ。そこに毎月家賃を直接渡しに行っていたのだ。

娘さんがグラマラスな美人で、アルバイトの女子高生は幼かった。彼女たちと買い物のたびに世間話をしたのを思い出す。シェワルネ・カツという白ワインが好きで、よく冷えたビンとさばの味噌煮の缶詰を買って帰るたびに、「今日もおひとりで飲むんですか？」と聞かれたことも思い出した。今なら「今度一緒に飲みましょうか？」とでも返せるのかもしれないが、あの頃のぼくはただ照れながら「ええ」と答えるのが精いっぱいだった。

そんな記憶はすっかりなくなっているものだと思い込んでいたが、不思議なものでこのストリートビューを見ているうちに後から後から溢れ出てきた。

当時の匂いすら蘇るようなストリートビューを180度回転させると、そこにはかつてコンビニだった看板の下に、車が一台停まっていた。何かしらの店のような造りだが、ぼくが知っているコンビニの入り口とは全く違う。

車の前には年老いた男性が写っていた。それがぼくの知っている大家なのかどうか、あやふやな写真を見る限りは判別できなかった。ただ、ひどく年老いたその男性は、ぼくが暮らしていたアパートよりもずっと疲れ果てているように見えた。

らくだ書店の話題からここまでの流れは想像できなかった。これがFacebookか（たぶん違う）。

ビリヤード。もしくは「そうだ、京都へ行こう」

(初出：Facebook 2011/08/12)

本八幡に新しくできたビリヤード場「Shelly&Belly」で3時間ほど玉撞きをした。

節電対策のノー残業デーとかで、早めに仕事が終わったのだ。

徐々に撞くので、なかなか思うように撞けなかったが、店長のMarkさんにいろいろアドバイスもらったり、お店に来ていた女の子と一緒に撞いたり、なかなか充実した3時間だった。ビリヤード場で見ず知らずの女の子と撞くなんてことは、今まで経験したことがなかったのだが、ちょうどいい練習相手だということでMarkさんが紹介してくれたのだ。

いい店である。と、さりげなく宣伝しておく。3時間で1400円というのは破格である。絶賛会員募集中だそうなので、ご興味のある方は以下のサイトをご覧ください。

<http://shellybelly.at.webry.info/>

翌日(8月11日)は京都出張だった。下見の日程は先週決まっていたのだが、新幹線のチケットを取っていなかった。

仕事が早く終わったのだから、ビリヤードに行く前にチケットを買っておけばいいものを、いつものようにどうせ当日朝でも取れるとタカをククっていた。

世間が夏休みであるということをすっかり忘れてしまっていたのだ。ずっと休みなく働いていたので、みんなも働いているのだろう、くらいに考えていた。ぼくの悪い癖だ。

そういえばやけに電車は空いているし、セミはやかましいし、暴力的な日差しのせいで常に暑い。

世間は夏休み真っ盛りなのだ。

ビリヤードを終え、帰りに新幹線の指定席を予約しようとして茫然とした。普通席がほとんど埋まっているのである。

予定では13時に京都国際会館に集合することになっていた。9時半の新幹線で十分間に合うと考えていた。

ところが、9時台は全て埋まっていた。

それどころか、8時台も全滅。7時台もだ。

空きがある一番遅い便は6時50分発だった。京都駅に9時11分に着く。約束の時間より4時間近く早いが、そんなことは言ってもらえなかった。

自由席という手も考えなくはなかったが、保険として席を指定しておいて損はない。

というわけで、6時50分発の新幹線を予約した。一体何時に家を出ればいいのか、と思いながら。

家に帰って、始発のバスの時刻表を調べてみた。家から最寄りの駅までは、バスで15分程度。歩くと1時間くらいかかってしまう。

始発のバスは5時46分だった。道さえ込んでいなければ6時50分の新幹線になんとか間に合う計算だ。

時計は既に午前0時を回っていた。5時46分のバスに乗るためには何時間寝られるだろうか。

まあ、新幹線に間に合わなければ始発の自由席を待てばいい、そう思いながら眠りに就いた。もちろん、京都に着いてからの4時間の自由時間についてなど、一瞬も考えなかった。まずは一日の仕事と3時間のビリヤードで疲れた身体で、寝坊しないかどうかだけを心配していた。

翌朝は、なかなかスリリングなタイミングだった。何かが少しでも遅れていれば、新幹線に間に合わなかったかもしれない。それぐらいの際どさだと、暑いとか眠いとかいう感覚が吹っ飛ばから不思議である。

かくして無事に京都に着いたわけなのだが、正直何もできなかった。

とりあえず四条くらいに行けば何かあるかなと思って烏丸通りを歩いたが、逆方向だと気付いたのは九条に着いてからだった。

仕方なく地下鉄に乗って、四条駅まで行き、河原町まで歩こうと思ったら、また逆方向の四条大宮に向かっていたことに気付いた頃には気力もすっかりそげ落ちていた。

何しろ暑い。

というか地図くらい見ろ、俺。

いくら京都は碁盤の目状だからといって、方向感覚がないところでむやみに歩くのは良くない。良くないのはわかっているのだが、余りにも時間があったのでいつものようにブラブラ散歩してしまったのである。

結局、スターバックスでアイスコーヒーを飲んだりしながら気力の回復を待った。

せっかく京都で4時間も自由時間があったのに、ただ歩き疲れてコーヒー飲んで終わり。修学旅行の自由時間やブラタモリには遠く及ばない。

というわけで、「そうだ、京都行こう」とフラフラ行く前に、事前にしっかり下調べした方がいいですよ、というお話でした。いや、出張のチケットは早めにとっておきましょう、という話だったような気もする。単にビリヤード一緒に撞く仲間が欲しいという話だったような気もしてきた。

要するにどうでもいい話なのである。いつもながら。

怒りと叱りについて考えていること

(初出：Facebook 2012/01/27)

久しぶりにこわっち日記でも物欲日記でも夢日記でもない日記を書きたくなった。

まずは↓この文章をお読みいただきたい。

<http://www.soubunshu.com/article/245674470.html>

年初の「平凡な日常」 宋文洲のメルマガの「読者広場」

常々考えているというか、行動の規範としていることなのだが、私は基本的に他人に対して突発的に怒らない。怒れないと言ってもいいかもしれない。

感情の起伏はもちろんあるし、他人の行動がイライラすることもあれば、とっさに怒鳴りたい気持ちになることもある。

しかし、その瞬間には口にしない。

なぜその人がそのような行動をするのか、なぜそのような失敗をしてしまったのか、それは故意なのか過失なのか、それをまず考えるようにしている。

そしてそれが故意であり、明らかにその行動が他人に迷惑をかけるとか、他人や自分自身にとって危険だと感じたときに初めて怒りを表に出すようにしている。

それは恐らくあることをきっかけにして染みついた心の動きである。

中学生の頃だったか、友人と遊んでいてカッとなったことがあった。非常に仲がよく、放課後に家に遊びにいたり、休み時間は常に一緒に遊ぶような関係だった。

トランプのド貧民（私の住んでいた地域では、大富豪のことをこう呼んでいた）をしていた。

負けが込むとどんどん連敗街道を進んでしまうこのゲーム。私は何連敗も喫していた。

その友人は、何回目かのド貧民になった私に向かって、「このドヒめが〜！」とからかった。

今から考えればただのじゃれ合いである。

しかし、そのときの私は耐えられない屈辱に感じてしまった。いわゆる中二病である。そういえば中二だったかもしれない。

私は頭に血がのぼり、彼の顔を平手でひっぱたいた。そして、自分で自分の行動に驚いた。

人を叩いたのはこれが最初で最後だった。

自分がひどく暴力的な人間になってしまったように感じ、その場から離れた。心を落ち着ける必要があった。

それ以来、その友人との付き合いは微妙になった。彼の言葉に我を失い、取り返しのつかないことをしてしまったのだと感じた。

怒りの爆発は取り返しがつかない結果を引き起こす、そう感じるようになった。

しかし、学習能力が低いのか、大学時代にも似たような経験をした。このときは殴ったりしたわけではなかったが、言葉での暴力をふるってしまった。そして私はまたひとり友人を失った。

そのようなことを経験することで、私は怒りを抑えることを学んだ。

他人の失敗や軽はずみな行動に関して寛容になるように努めた。そして、恐らくはかなり忠実に実行できるようになった。大人になったということなのかもしれない。

しかし、子供を育てるようになると、即座に叱る必要がある場合も出てくる。子供には、悪いことをした瞬間に叱ってあげる必要があるのだ。それは私を非常に混乱させる。

怒りという感情に強い抑制をかけているので、とっさに叱れないのである。怒りと叱りはもちろん違うのだが、突発的に感情を高ぶらせるという意味で似ているのかもしれない。

その点、かみさんは自在だ。ダメなことはダメとすぐに言える。というか、むしろ怒りっぽいかもしれないとも思う。気に食わない運転をする車が走っていれば文句を言うし（相手には聞こえないけど）、ドラマでむかつく役があると本気で怒る（これも相手には聞こえないし、それはどうかとも思う）。ついでにいえば、私が何か失敗してもすぐに怒る（もちろんわざとじゃないので、私としては釈然としない）。

私の考えでは、故意じゃない失敗については怒っても仕方がない＝怒る必要がない＝怒らない、

ということになる。

それが不用意であったならば不用意だったことを責めるべきで、失敗によって起ってしまった現象はもうどうしようもない。それを復旧すべく何をするかを考えた方が建設的だし、前向きだ。

しかし、冒頭に紹介した文章を読んでふと、こういう考え方をするのは特殊なのかと思った次第である（かみさんの行動を見ていてもよく思うことでもあると付け加えておこう）。

基本的に私はコーヒーをこぼされた隣の人の気持ちはよくわかるのだが、この筆者の気持ちはよくわからない。

娘さんが足湯の水をこぼしたのは、

- ① 水がこぼれるかもしれないということを想定して周りにタオルを敷くなどの対策不足（実際には私もやってしまいそうではあるが）
- ② 足湯の縁に立とうとした娘の想像力の欠如（これも、8歳の女の子ならやったてもおかしくない行動だと思う）

が原因だと思うのである。責めるのはこの2点であって、起ってしまった現象（水が床にこぼれたこと）は一緒に打開するのが普通だろうと思う。

もし自分がこの筆者の立場だったら、まずこぼれた水をどう始末するかを考え、行動する。驚いて声をあげるくらいはするかもしれないが、怒鳴るなんてことはまずない。自分のやったことだから自分で始末しなさいよ、なんて口が裂けても言えない。なんて残虐な親なのだと思ったくらいだ。

状況が改善したら改めて上の2点について子供に言って聞かせつつ、もうしないように注意した上で、自分の不用意（①の対策不足）も謝る。それ以上でもそれ以下でもない、と想像する。

もちろん、身の回りでそういうことが起こってみなければ実際に自分がどういう行動をするかはわからないが、怒鳴って子供に後始末をつけさせることだけは絶対にしない、と断言できる。手伝ってくれば頭をなでてやるかもしれないが、手伝えとは言わない。手伝えと言わなくても自発的に手伝うようになって欲しいとは思いますが、強要は決してしない。と、思う。

コメントにはこの娘さんや筆者に対して感動したという意見がたくさん寄せられているが、私は全く別の観点でこの文章を読んだ。娘さんの行動は確かに感動的だが、こんな教育方針の両親に

育てられてかわいそうだ、という気持ちの方が強かったのである。

もちろん、娘さん自身はたぶん自分のことをかわいそうだなんて思ってないだろうし、むしろ厳しく育てられ、強かに育っていくのだろうとは思う。

水をこぼしてしまった自分への戒めとして漢字の練習をする8歳の女の子の姿は健気そのものではあるが、過大な責任を背負わされているように思えてならない。というか、その姿を見て目を真っ赤にした母親に対しては、誰のせいやねん、とツッコんでしまいそうだ。即座に怒ることはできなくても、ツッコミだけは妙に自信満々である（汗）。

とまあ、そんなことを考えた昼休みであった。

よそさまの教育方針に対していろいろ思うのも失礼な話だとは思いますが、もやもやといろんな思いが頭を駆け巡ったので、少し書いてみたくなった次第である。

みなさんはどう考えるだろうか。

(初出：Facebook 2012/10/26)

昨日は家飲みしながら、KindleとKinoppyとで読み比べてみた。端末は現時点で最も解像度が高く、家で電子書籍読むなら最高品質だと思われるiPad (3rd)。

縦書きの書籍のレイアウトとしては、Kinoppyは紙の書籍の雰囲気大切にしている。紀伊国屋の読書カバーつきの本を開いて、少し黄色がかった紙の本をペラペラめくる感じ。ご丁寧に、木目調のテーブルの上で本を開いているような印象になっている。一枚一枚、ページがカールしてめくれるので、あたかも紙の本をめくっている感覚になる。これはこれで非常によくできているのだが、画面をタップしてもページ送りが遅れることがあ。そのおかげで2ページ一気にめくってしまったりする。アニメーションをオフにすればレスポンスも向上するかというと、ページの先読み処理のタイミングとアニメーション（スライド・カール）がちょうど同期を取っている感じになっていて、アニメーションなしにすると一瞬「ページ読み込み」という画面が差し込まれたりする。ちょっと残念。

また、辞書を引くために文字列を指定するのだが、この操作感がイマイチ。漢字が並んでいると、その先頭から末尾までを自動的に選択してくれる部分はさすが（ちなみにi文庫HDも同じ）。だが、そうでない場合はカーソルの範囲指定がなかなか思うようにいかず、イライラすることがある。カーソル拡大枠が画面の左右に出るので、ちょっと見づらい。さらに、文字を選んで「辞書」「内蔵辞書」と選ぶので、ひと手間多い。もうひとつ言えば、辞書を引いた後にカーソル選択が解除されてしまうのも残念。別の辞書やネットでも検索してみたい場合、もう一度文字列を選ぶ必要がある。

一方のKindleは、レイアウトがちょっと違う。マンガは見開きだが、テキストベースの書籍の場合、見開き状態ではなく、横長の紙の中央にテキストが並んだような雰囲気だ。文庫本を読んでいるというよりは、テキストをA4の紙に印刷したものを読んでいるような感覚である。これは、「書籍」はレイアウトも含めたコンテンツが重要なのではなく、「テキスト」自体が重要なのだ、という感覚なのだろう。このあたりの「書籍」に対する感覚の違いは、日米でずいぶん違う気がする。

辞書を引く、という行為に関してはKindleが圧倒的に便利だ。連続漢字の自動範囲指定はできないが、文字操作は一般的なiPadの操作感と大差ない。カーソル拡大枠は、文字の近くに虫眼鏡が出るタイプ。さらに、文字列を選んだだけで自動的に内蔵辞書を検索して画面下の簡易情報枠に表示してくれるので、「辞書」「内蔵辞書」と選ぶ仕様のKinoppyに比べると雲泥の差である。詳しく辞書を引いたりネットを調べたい場合は、簡易情報枠から飛べるようになっている。このひと手間の差は歴然である。特に、洋書を読む場合など、辞書を引く機会が多い書籍に重宝する。また、意外に便利なのが「メモ」機能。簡単なメモを書籍の中に埋め込める。埋め込んだメモは

、クラウドで連携してくれるので、どの端末で開いてもちゃんと反映してくれる。

なお、マーキングはどちらもできる。また、i文庫HDの場合、そこからツイートもできたりする。

個人的な印象としては、どちらも一長一短。Kinoppyの紙の書籍への愛着ぶりは称賛すべきだし、だからこそKindleストアが来るまでは紀伊 国屋オンラインで購入していた。Kindleの書籍を「テキスト」として扱うスタイルも好き嫌いはあるかもしれないが、読んでいて違和感はない。むしろ、テキストの世界に没頭しやすいのかもしれない。

そして、どちらのアプリにも言えるのが、「どの端末でも同じところから読める」という便利さだ。Wi-Fiに繋がらさえすれば、端末にダウンロードしてなくてもいいという気軽さがある。もちろん、あらかじめダウンロードしておけば、ネットに繋ぐ必要はない。やはり、いつでもどこでも好きな本が読めるというのは、たまらない。

(初出 : Facebook 2012/11/06)

10月のKindleストアの日本進出でにわかになぎやかになってきた電子書籍業界ですが、ご存知のように数年前からずっと「電子書籍元年」が続いている状態でした。

一般的には2010年が電子書籍元年と呼ばれていますが、個人的には、電子書籍元年は2004年のLIBRIe登場の年だと思っています。LIBRIeはSONYが出したeInk閲覧端末で、今のSONY Readerの原型です。紙のような白地に、インクのような文字や画像が浮かび、消費電力が少なく、2週間くらい充電しなくても平気な端末でした。

このLIBRIeは、「貸し本」という今では信じられないビジネスモデルだったことが災いして、残念ながら07年に終了します。品ぞろえも悪く、とても成功したビジネスモデルとは言えません。惨憺たる結果だったと思います。しかし、電子書籍の便利さを知るにはいいデバイスでした。何冊もの本を、それぞれ本棚ごと持ち運ぶことができ、それでいて重くない。端末は片手で持ちやすく、ページ送りは今のReaderやKindleに比べるとずっと遅かったですが、我慢できないレベルではありませんでした。

当時はBBeBという形式でした。「貸し本」サービス自体は実は使用したことはありませんでしたが、HTMLをBBeBに書き出すソフト（SONYから提供されていた）を使って、青空文庫を変換して読んでました。そのほか、連番JPG（スキャナーで取り込んだ画像で、今でいう自炊）をBBeBに変換することもできて、快適な自炊系読書もしていました。ただ、自炊系というのは一度やってみるとわかりますが、意外と大変です。最初は嬉しくてやっていたのですが、徐々にそれが作業のように感じるようになり、いつしかやらなくなりました。こんなに苦勞するなら、電子書籍化されたものを買った方がいい、と思えました。

普及するにはまだまだ高かったけど、ああいう専用端末が2万円以内で手に入るならとりあえず買っとけ、とブログで書いたことがあります。まさに今年、実現しました。1万円切る端末も出てしまっているほどです。これはさすがに想像の外。実に8年くらい経っていますが、とりあえず買っとけ(笑)。

参考までに、当時のブログの記事へのリンクも載せておきます↓。

<http://d.hatena.ne.jp/shallvino/20041229/p1>

当時は今のようなスマホもモバイルWiFiもなかった時代です。電車の中でニュース読もうとするなら、携帯電話のiモードなどでちまちまWebページをのぞき見るくらいのものでした。なので、ニュースをわざわざ変換して端末に転送して読んだりしてたんですね。たった数年前なのに、隔世の感があります。

その後、いわゆる「電子書籍元年」は鳴り物入りでやってきます。2010年、Kindle3とiPadが登場した年です。

初代Kindleの登場は、実はもう少し前、2007年でした。この当時はそれほど注目されていなかったように記憶しています。日本ではLIBRIeビジネスが失敗したばかりで、見た目がそれほど変わらないKindleが出てきたからと言って、これがそこまで爆発的に普及するとは思っていませんでした。

ところが、Kindleは電子書籍界に嵐を呼びこみました。テキストベースの電子書籍のデータ量が少ないことを利用して、3G回線を無料で使わせることで、購入してから端末に書籍が届くまでの時間を圧倒的に短縮したのです。

今では当たり前のように高速回線が飛び交い、Webもスマホで自由に見られますが、当時はモバイ

ルWiFiがようやく登場して普及し始めた頃。しかもまだ接続料が高かったのも、無料で書籍が端末に届くということがには信じられませんでした。これは時代が変わったな、そう思ったものでした。

Kindleは当時、日本では販売されていませんでしたが、有志が日本語化に成功し、私もDXをAmazon.comから購入しました。電子書籍業界はこれで変わる、と誰もが思った頃、AppleもiPadを出しました。

正直、Kindle DXの登場で、個人的にはこれが電子書籍の最適解はこれだと確信していました。だからこそ、わざわざアメリカのAmazonで購入し、あまつさえ日本語化までしたのです。そうする価値がある、とっていました。

しかし、実際にiPadを手にして、カラーの雑誌をペラペラめくるのを見ると、eInkよりもカラーの方がいいのではないかと、思うようになりました。しかもそのパフォーマンスを見せてくれたのが、『Web2.0』で有名になった梅田望夫さんご本人。某所でお会いした際、まだ日本では発売前だったiPadを手にして、「Kindleはもう終わりましたよ」梅田さんは笑いながらそう言い放ちました。

ここから、個人的に迷い始めました。というか、ようやく手に入れて日本語化までしたKindle DXを放り出してiPadを購入してしまいました。それぐらい、衝撃的でした。

iPadの利点は、Kindleのように固定フォーマットだけでなく、PDFやDOCなど、あらゆるフォーマットの書籍が読みこめることでした。多彩なアプリがそれを可能にしていました。

実は、SONY Readerの日本版も2010年に製品化されていたのですが、上記の理由でiPadの方が便利だと判断していました。確かに日本語書籍はストアが未発達でまだ発展途上だけれど、青空文庫はいつでも読めました。Kindleがそのうち日本でも展開するだろうから、それまではとりあえずiPadで青空文庫でも読んでればいいのか、そう思いました。

難点といえば、充電を数日置きにしなければならないことと、片手で読むには重すぎることでした。実際、電車の中で片手で読むのは困難でした。特にラッシュの時間帯は、iPadをカバンから出すことすら憚られました。

今年になって、iPadのディスプレイがRetina化し、もはや勝負あったと個人的には思いました。確かに片手で読むには重いけれど、この解像度は満足のいくものでした。少なくとも、家の中や喫茶店で本を読むには現時点で最適な端末だと今でも思います。

後はKindleが日本での展開をいつ始めるか。まさかそれも2012年中に始まるとは半年前には想像もしてませんでした。

同じ日、Kindleの日本展開が発表されるのに先立って、AppleがiPad miniを出して来ました。噂はありましたが、Appleがこれまで出してこなかった7インチ前後の小型タブレットです。

Kindle Fire HDやNEXUS7と比較されることの多いiPad miniですが、他の小型タブレットと比較するよりは、iPad2と比較した方がわかりやすいと個人的には思います。

要するに、iPad2と同じ性能・解像度のものが、より薄くより軽くより小ぶりになって再登場してきた、という感じです。

実際に触ってみるとわかりますが、まさに小型版iPad2です。それ以上でもそれ以下でもありません。

電子書籍端末として見た場合、確かにKindle Fire HDやNEXUS7と比較すれば、解像度は低いです。が、iPad2で十分だと思ってきた人たちにとってはより身近なiPadとして活躍するでしょう。

Rat inaディスプレイさえ見たことがなければ、十分綺麗な画質で電子書籍が楽しめます。マンガも見開きで読めます（Rat inaに比べるとやはり細かい文字は読みにくいですが）。

一度電車の中で読んでみると、7インチ前後の大きさというのはまさに文庫本を見開いたぐらいの大きさと読みやすいということがわかります。持ち運んで読むならばこのサイズは最適です。雑誌を読むにはやや物足りないけれど、活字テキストを読むには十分過ぎます。むしろ、iPadよりも視界が狭いので読みやすいとさえ思います。

iPad miniはベゼル（本体表面のスクリーンの外枠部分）が細くて持ちにくいのではないかと、そう思っていたのですが、本体を持つ指が画面にはみ出しても、操作しているのではなくホールドしているだけだと判断してくれて、無視してくれる仕様になっています。Kindleアプリは残念ながら綴じ込み部分は再現されず、B5の紙を横にして読むような感覚なので、あまり恩恵を感じませんが、Kinoppyのように綴じ込み部分があると、そこに思い切り親指を投げ出して読むことができます。まさに文庫本のホールド感。やめられません。

小憎らしいですが、これは素晴らしい機能です。文庫本のページの中央部分に親指を挟みながら持つという、最も一般的な読書スタイルが実現できます。この機能、見過ごしがちではありますが、かなり使い心地を左右する機能です。是非Kindle Fire HDにも搭載していて欲しい機能です。

というわけで、iPad miniは活字の電子書籍を読むにはかなり適した端末と言えそうです。7インチ市場が電子書籍を爆発的に普及させる確信のようなものを感じました。

欲を言えば、Rat inaディスプレイでiPad miniが出れば、とも思いますが、まだ製品化するにはコストも重さも電池容量も足りなかった、ということなのでしょう。それらの条件が出そろったのを待っていると、それこそKindle Fire HDに電子書籍の市場を独占されてしまう、という危機感もあったでしょう。潮時——正しい意味での——とは、まさにこういうときだと思えます。

納屋雑記 2011～2012

<http://p.booklog.jp/book/31417>

著者：なんとなく納屋

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shallvino/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/31417>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/31417>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.